

# 与那覇勢頭豊見親について

下地 和宏（宮古島市史編さん委員）

## 1、はじめに

与那覇勢頭豊見親は洪武23年（1390）中山に初めて朝貢したことでつとに知られる歴史上の人物である。にもかかわらず霧の中の人物のままである。中山朝貢から340年近い雍正9年（1729）になって王府は宮古・八重山にも家譜の編纂を許可する。宮古・八重山は「幾世代を経て、子孫は乱れ、親疎も知らない。それで系統派流・祖宗の功德、未だ詳明せず」（球陽）との理由による。それから25年後の乾隆19年（1754）に与那覇勢頭豊見親を元祖とする白川氏家譜正統が編纂される。古老の話も聴取しその編纂に努めたであろうが、元祖与那覇勢頭豊見親は「童名真佐久。生卒不伝あるいは天人の子という。父母不詳。室は久栄免嘉。姓名、生卒ともに不詳」と記す。言うことに事欠いて「天人の子」とするなど曖昧この上ない。

「与那覇勢頭豊見親のニーリ」が多良間島に残されたおかげで与那覇勢頭の一端をかいま見ることが出来る。このニーリの解釈について、与那覇勢頭が瀕死の重傷を負ったのはいわゆる「与那覇原いくさ」であるとの考えがある。与那覇勢頭は与那覇原の首長佐多大人と親子の関係であるという前提に立っている（宮古島庶民史・202頁）。

与那覇勢頭は宮古島主に任命されて帰島するが、何をしたのかも全く伝わっていない。彼の一子泰川大殿も生卒不詳。妻は母と同じ名の久栄免嘉で姓名、生卒不詳。三人の男子を儲けるが二人は早世。第三子が大立大殿で父が伯牛の病（癩病という）で隠棲したためか家譜では2世となっている。大立大殿も生卒不詳。童名真佐利。妻は金免嘉で姓名、生卒不詳。となっている。

本稿は旧記類や家譜等の資料をもとに与那覇勢頭の生卒、中山朝貢、島主任命、与那覇原いくさ等について考えることにする。

## 2、与那覇勢頭豊見親のニーリ

与那覇勢頭の生きざまをかいまみせる資料に「与那覇勢頭豊見親のニーリ」がある。このニーリは多良間島に残されていたもので垣花良香氏が記録したものという。57節から成る長歌である。稲村賢敷氏は「この神歌は、もと島内到处に歌われたものであろうが、後世になって自然に歌われなくなったものか、それとも故意に歌わせなかったかは知らぬが忘れられてしまった。しかし不思議なことには42節以後の中山朝貢の部分だけは下地地方または平良の一部にも現在まで歌われている。」（宮古島庶民史・194頁）と認識している。多良間島では年忌祭のンニツキの最初に「むいかぐすゆなば」で歌われるようである。

この長編の二一りは『宮古島庶民史』（稲村賢敷・1957年。以下庶民史と略記）、『宮古島旧記並史歌集解』（稲村賢敷・1962年。以下史歌集解と略記）、『村誌たらま島』（1973年。以下たらま島と略記）、『南島歌謡大成Ⅲ 宮古編』（外間守善・新里幸昭、1978年）などに収録されている。

庶民史は57節でそれ以外は55節となっている。どこが違うのかをみてみよう。庶民史の

37、人間ぬ なれやゆ

ゆかいしゃん あんだら

38、きばんしゃん あんだら

ゆかいがゆ うえんな

39、きばんしゃゆ みうすな

が史歌集解では、

37、人間ぬ なれやゆ

ゆかいしゃん あんだら

きばんしゃん あんだら

38、ゆかいがゆ えーんな

きばんしゃゆ みうすな

と修正されている。また庶民史では、

47、んなぐ船ん なかん

しなぐ船ん なかん

48、にんた起き しうちゆい

とあるが、史歌集解では、

46、んなぐ船ん なかん

しなぐ船ん なかん

にんた起き しゆうちゆい

と修正されている。

垣花良香氏が記録したという57節は55節に訂正されるものである。ここではたらま島の「むいかぐすゆなば」を全て掲載する。多良間島で歌われていたのだから、内容は同じでも庶民史や史歌集解とは表記や意識に若干の相違がみられる。

むいかぐすゆなば

1 むいか<sup>ぐす</sup>越<sup>ゆなば</sup> 与那覇よ

与那覇しど<sup>とよみや</sup> 豊見親よ

2 みゃーくぬ<sup>はず</sup> 始まりんよ

島ぬ<sup>すま</sup> 新立んゆ<sup>あらたつ</sup>

3 とゆむしゆが ねーんには

むいかぐす（地名）の 与那覇よ

与那覇せど 豊見親よ

宮古の はじまりに

宮古の 島立ての頃

すぐれた人が いないので

- 名といしゆが ねーんにば 統治する人が いないので  
 4 であら、ばん とゆみみー それでは私が 出してみようと  
 であら、ばん 名とりーみー それでは私が 統治しようと  
 5 出でとゆみー うたすが 出世して 島を治め  
 いで名とり うたすが 名高い豊見親と いわれていたが  
 6 しゃなんすん うぶさん ねたむ者が 多く  
 にくんすん たいさん 憎む者が たくさん出てきて  
 7 しゃなんすん しゃなまり ねたむ者に ねたまれ  
 憎んすん にくまり にくむ者に にくまれ  
 8 にいら島 下りていゆ 後生に 落ちてしまった  
 あらう島 うりていゆ 死人の世界に 落とされてしまった  
 9 にいらてだ <sup>まい</sup>前ん 後生の王の 前に  
 あろう天太 まいん 死後の世界の王の 前に  
 10 びくむしろ すきうとり むしろを 敷き  
 ばだやばら 敷きうとり やわらかいむしろを 敷き置いて  
 11 びく<sup>たたみ</sup>畳 うえぐん そのむしろの 上に  
 ばだやばら うえぐん やわらかい敷物の 上に  
 12 手びさぶり 拝みば ひれ伏して 拝むと  
 びたびたと うがみば ひざまずいて 拝むと  
 13 なうやりが 与那覇ゆ どうして 与那覇よ  
 いかやりが 豊見親ゆ どのようなわけで 豊見親よ  
 14 うわばだぬ <sup>やらび</sup>童ぬ まだ若い お前が  
 うがみしゃぬ あてなぬ まだ若々しい お前が  
 15 にいら島 下りきすが このにいら島に 下りて来たのだ  
 あらう島 うりきすが この異なった世界に 下りてきたのだ  
 16 まくとから うみうき 真実を 申し上げます  
 まびらから うみうき 正直に 申し上げます  
 17 宮古の ぱずまりんゆ 宮古の はじまりに  
 島ぬ あら立んゆ 宮古の 島立ての頃  
 18 とゆんしゆが ねーんにば すぐれた人が いないので  
 名といしゆが ねーんにば 統治する人が いないので  
 19 であらばん とゆみみー それでは私が 出してみようと  
 であらばん 名とりみー それでは私が 統治しようと  
 20 いでとよみ うたすが 出世して 島を治め  
 いで名取り うたすが 名高い豊見親と いわれていたが

- 21 あが二〇才<sup>ばたつ</sup> ばだんゆ まだ二〇才の 頃に  
うぶすぐり ばなんゆ まだ希望に もえる頃に
- 22 しゃなんすが うぶさん ねたむ者が 多く  
憎むしゆが たいさん 憎む者が たくさん出てきて
- 23 しゃなんすん しゃなまり ねたむ者に ねたまれ  
にくむすん にくまり 憎む者に にくまれ
- 24 にいら島 下り来すゆ この世界に 落ちてしまったのです  
あろう島 下りきすゆ 後生に 来てしまったのです
- 25 にいら天太 がなすや それを聞かれた にいら天太は  
あろう<sup>うぶ</sup> 大ちようゆ この世界の 帳簿をお出しになり
- 26 下<sup>すた</sup>うから うくしば 昔のことから 現在までを  
おわりがみ しゃばきば くわしく お調べになったところ
- 27 胸ぬ かぎ者やり 豊見親は 善人で  
きむぬ かぎむぬやり 心のやさしい 人だったので
- 28 ゆぬ宮古 帰りゆ もとの宮古島に 帰りなさい  
ゆぬしゃんか 戻りゆ これまでの世界に 戻りなさい
- 29 ぶからしゃど ありしゆが しかし、豊見親は それはうれしいが  
いしゃうしゃど ありしゆが そのお心は 有難いが
- 30 目ふつ がーりからや 眼も口も 変わってしまったからは  
うむら<sup>が</sup> 変りからや 死んだ姿に なってからは
- 31 ゆぬ宮古 かいららん どうして宮古に 帰れましょう  
ゆぬしゃんか 戻ららん 宮古に戻ることは 出来ません
- 32 あんやちか 与那覇ゆ それでは 与那覇よ、と  
うりやちか 豊見親ゆ にいら天太は 言われた
- 33 にいら うぶみつんゆ 後生の 大道に  
あろう 大道んゆ あろう島の 大道に
- 34 青<sup>あう</sup>つなゆ ぱいばいら 茅の網を 置き渡し  
まぶつなゆ ぱいばいら ま苧網を 渡してやろう
- 35 うりたどり<sup>かい</sup> 帰りよ それをたどって 帰りなさい  
いとたどり むどりよ 網をたどって 戻るがよい
- 36 島行かば 与那覇よ しかし、帰ったら 与那覇よ  
くに行かば 豊見親よ 宮古に戻ったら 豊見親よ
- 37 人間ぬ なれやゆ 社会の 常として  
ゆかりしゃん あんだら 富める者も いるだろう  
きばんしゃん あんだら 貧しい者も いるだろう

- 38 ゆかりがゆ えーんな 富める者を見ても 羨むな  
きばんしゃゆ みうすな 貧しい者を見ても 軽蔑するな
- 39 にいら天太 みうかぎん 後生の王の おかげで  
あらうてだ みうぶぎん あらう天太の お情けで
- 40 糸たどり むどりば 豊見親は 綱をたどり  
綱たどり 帰りば 宮古島に 帰った
- 41 まばずみぬ ぬんでいや 更正して 出てきたのは  
新あらばなぬ すでいいや 生きがえった ところは
- 42 みゃーくぬ 寅とらの方んゆ 宮古の 東方にある  
島ぬ わーらんゆ 島の 上方にある
- 43 白しるばま浜ん 出んでうちゆり 白川浜であった この浜に出て  
かぎ浜ん んでうちゆり この美しい浜で 生きがえり
- 44 白浜ん なかん 白浜の まんなかに  
かぎ浜ん なかん 美しい浜の 砂の上に
- 45 んなぐ舟ふに ばぎうちゆい 砂の舟型を つくり  
しなぐ舟 ばぎうちゆい 砂舟を つくって
- 46 んなぐ船 んなかん その船の まんなかに  
しなぐ船 んなかん 砂船の なかに
- にんた起き しちゆい 寝たり起きたり しながら
- 47 寅ぬ方ゆ 見いりば 上方を 見ると  
あがるなゆ 見いりば 東の空を 見ると
- 48 ゆしゃすみゃーや きんたてー ペガス星座の 四ツ星が見えた  
うりが あとからや その 次には
- 49 んに星ば あがらしい スバル星群の 星々が見え  
うりが あとからや その 次には
- 50 むい星ば あがらしい 箕こぞにたた 駟車座星群が見え  
うりが あとからや その 次には
- 51 たたきゆみや あがらしい おおくま座が 見え  
うりが あとからや その 次には
- 52 うぷらくーら あがらしい 夜明けの明星が 見えて  
うりが あとからや その 次には
- 53 うぶてだゆ あがらしい お日様が 上ってきた
- 54 にいらてだ うかぎん こうして にいら天太  
あらうてだ みうぶぎん あらう天太の おかげで更生し
- 55 島すまた立てば ならいゆ 島の立て直し 村の統治を習って

この二ーりは二つの構成で歌われている。前段は40節まで。与那覇勢頭は選ばれて島の主長になった。ところが憎む者のために陥れられて、にいら島・あろう島（後生）に下りるが、にいら天太（後生の王）のおかげで蘇生することができた。との意である。41節以降が後段。にいら天太から生き方を教えられ蘇生した豊見親が白川浜から船出して、島立て・ふん立て（村の統治）の方法を学び、もどってから立派な統治者になった。との意である。

2～5節は与那覇勢頭が住民から推されて島の主長になったことを歌う。それは「土民に推戴され一島の主長と為る」（白川氏家譜）に反映されている。6～8節では戦のため瀕死の重傷を負ったと歌う。これを稲村賢敷氏は“与那覇原いくさ”と解釈している。この解釈は与那覇勢頭が佐多大人の子として目黒盛との戦闘に参加したとの前提がある。与那覇原いくさが何時あったかという問題と深くからんでいる。これについては後述する。

41節の「まばずみのぬんでいや／新ばなぬすでいいや」の解釈についても、「初めての更生した仕事は」（稲村賢敷氏）、「更生して、生きかえったところはの意」（たらま島）の二通りある。最後の55節は「島立てはならいゆ／ふん立てはならいゆ」で、「宮古島を立派に立て直した。後世の人々はこれを見習えの意」（稲村）、「島の立て直し村の統治法を習って、立派な統治者になった」（たらま島）と二通りある。どちらも微妙な解釈のちがいである。

14節の「あてなぬ」は史歌集解では「あていなぬ」、19節の「であらばん」は「じゃらばん」、33節の「うぶみづんゆ」は「うぶんづんゆ」、38節の「ゆかりがゆ」は「ゆかいがゆ」である。51節の「たたきゆみや」星はたらま島は「おおくま座」と解している。

### 3、中山朝貢の動機

与那覇勢頭が中山に朝貢する動機はどこにあるのだろうか。このことを琉球の正史や宮古の旧記類はどのように伝えているのだろうか。以下時系列的にみてみよう。

#### ① 中山世鑑（1650年）

大明洪武ノ始ヨリ、球国、大明へ、五年・三年ニ一度、往来有。依テ球人、離風ニ逢テ、彼二山（注：宮古・八重山）へ至ル事、度々也。其ヨリシテゾ、彼二山モ、琉球ノ王国タル事ヲバ、知テケリ。依テ、慕義向風、始テ来貢ス。（「琉球史料叢書」第五巻）

王府の正史に初めて収録された中山朝貢の出来事である。表題は「洪武二十三年庚午、南夷、宮古島・八重山島、重譯、始来貢ス」である。明国への琉球国の使者が宮古・八重山に度々漂着したことで琉球国の存在を知らされる。それで「義に慕い風に向い」始めて来貢したとのことである。

#### ② 中山世譜（1724～25）

先、是中山。遣、使入、京。其使臣被、風飄、<sub>1</sub>。至、彼島<sub>1</sub>。時乃二島人。見、琉球行、事大之礼<sub>1</sub>。

各率<sub>2</sub>管属之島<sub>1</sub>。称<sub>レ</sub>臣納<sub>レ</sub>貢。由<sub>レ</sub>是中山始強。(「琉球史料叢書」第四卷)

「蔡温本」といわれるもので中山世鑑を漢訳補訂したものである。表題は「本年。宮古・八重山。始来称<sub>レ</sub>臣 納<sub>2</sub>貢于中山<sub>1</sub>。」である。「宮古・八重山島の人はいずれも管属の島を率いて朝貢した。それで中山は始めて強くなった。」という件が補訂されたとみられる。

③ 御嶽由来記 (1705年)

当所(注：宮古島)は小島にて万反不自由である。いかにもして大国に通交せんと思ひ、ある夜白川浜で砂の上に祭壇を飾り、香花供物を備え、二、三丈の竹に五色の糸をつり上げ、その影に座して大国の方角を教え給えと諸星を拝んだ。その夜の明け方にその糸は皆な北に打ちなびき、寅の方に島陰が見えたので、歡喜の思いで船を仕立て広瀬の嶽に願いをかけ、悪鬼納加那志に登り、初めて拝謁したという。(「平良市史」第三卷)

白川浜に祭壇を設け大国への通交を祈願、上国した情景は二ーりの44節から55節を反映している。この由来記に初めて与那覇勢頭という特定された個人が登場する。仲宗根豊見親よりはるかの昔の人であると、あえて断りするというのは、御嶽由来記が編纂された頃は与那覇勢頭の社会的認知度は仲宗根豊見親より低かったのであろうか。この由来記は王府の修史事業の一環として宮古で編纂された最初の公的報告書である。

④ 琉球国由来記 (1713年)

報告された廣瀬御嶽の由来が忠実に描写されているので略す。項目は廣瀬御嶽。

⑤ 琉球国旧記 (1731年)

④の由来記を漢訳にしたもの。略す。項目は廣瀬嶽。

⑥ 球陽 (1743～45年)

②の中山世譜をほぼそのまま収録しているので略す。〈附〉に「与那覇勢頭豊見親初めて以て款を中山に納る」で収録されている。

此の時(注：大明洪武年間)、本島(注：宮古島)は兵乱大いに発し、防戦殺奪して干戈息まず。雄を争ひ勇を恃みて自ら島主と為る。是に於て、勢頭豊見親深く念へらく、騷動兵乱し民塗炭に陥る。聖国に来享して徳政に沐浴し仁風を涵遊して以て人民を安んじしめんと。(球陽・読下し編)

以下は白川浜で祭壇を設け祈願する情景なので略す。宮古島は「防戦殺奪」な状況で「雄を争ひ勇を恃みて自ら島主と為る」時代である。このような争乱社会の宮古は初めて球陽に収録される。球陽の編纂(1745年)以前に宮古から報告されたのであろうか。もしその内容報告があったとすれば御嶽由来記(1707年)、雍正旧記(1727年)であろう。しかし見ることはない。記載されていないのである。考えられるとすれば、1748年の「宮古島記事仕次」(以下記事仕次と略記)以前の友利首里大屋子の「宮古島の古事」であろうか。残念なことに存在不詳の幻の書なので確認できない。二ーりでは2節～7節、17節～23節にその情景を見ることができる。

⑦ 白川氏家譜正統 (1754年)

麻姑山は中山を遙に離れ、渺々たる海外に在る。民俗は常に暴戾を馳せ、強は弱を凌ぎ、弱は強に詔いて、仁義・忠孝の道を知らず。(主長に推戴された与那覇勢頭豊見親は)常に民俗を憂え、心を尽し力をつくし能く教導する。奈せん俗習は深く染み革まらず。(中山との通交開始)以後中山の徳沢を深く蒙る。民俗漸く開き、五倫有るを知り、四民の道大いに和睦致し、平安の喜びを得る。我島の千載の栄福である。

以上の資料から見える与那覇勢頭の中山朝貢の動機は、

- 1、宮古島に飄到した明国への使者から琉球国や明国の存在、琉球国は事大の礼を行っていることを知り、通交することを願う。
- 2、宮古島は兵乱で、強は弱を凌ぎ、弱は強に詔う社会である。この民俗を革め民を安じさせるには大国の徳政にすがると悟る。

ということにつきるが、どうであろうか。これでは与那覇勢頭が中山に詔ったにすぎない。宮古・八重山の朝貢で「中山始強」と中山に言わせた背景は全くみえない。稲村賢敷氏は、「豊見親の中山朝貢の目的は、大国に通しその統治を受けることによって島内の秩序を維持し、平和を致すことにあったことは明らかである。」そして、他の西南諸島が経済上の理由から中山朝貢したとは異り、「人民を戦禍の苦しみから救済しようという政治的意義が主となっていることは明らかである」(庶民史・206～207頁)と、政治的な動機であることを強調している。

#### 4、中山任命の宮古主長

土民に推戴され宮古の主長に就いた与那覇勢頭は「洪武二十三年庚午、南夷、宮古島、八重山島、重譯、始來貢ス」ることになった。そして「其後ヨリシテ、毎年ノ朝貢ニハ定リヌ」(中山世鑑)こととなった。重譯とは第三の言語を介して意志の疎通を図ることである。宮古語と琉球語を解する言語があったことになる。その言語とは何か。宮古と琉球国に通交していた人々がいたことを考えさせられる。「婆羅公管下密牙古人」の言語を理解する人が中国にいた(1317年)ということと関係するのだろうか。

白川氏家譜は遺老(老人)の話として、与那覇勢頭が初めて中山に上った時、旨を奉り泊御殿に滞在した。この時、宮古の人民は琉語を理解できない者が甚だ多くて、事を弁ずることが出来なかった。それで与那覇勢頭は命を奉り怜悯の者20名を択び、泊御殿に住ませ琉語を学ばせた、という。

遺老の説は宮古と琉球国は「重譯」で通交していたことを裏付けるものであろう。ところがその後の正史ではどう理由なのか「重譯」の文言は消滅している。

中山世鑑を漢訳補訂した中山世譜には〈蔡鐸本〉(1697～1701)と〈蔡温本〉(1724～25)がある。宮古・八重山は「各管属之島ヲ率テ、臣ト称シテ、貢ヲ納ムル。是レニ由リ中山始メテ強シ」と強調する。「中山始強」の文言が初めて加えられた正史である。しかし、「重譯」の文言はない。「各管属之島ヲ率テ」朝貢したというのは、与那覇勢頭や八重山の酋長の他にも



朝貢した豪族が居たことを示唆しているのだろうか。中山世譜はほぼそのまま球陽に踏襲される。

朝貢した与那覇勢頭は中山察度王から宮古の主長に任命されたという。同行した八重山の酋長も任命されたのだろうか。与那覇勢頭が宮古の主長に任命されたという年代について宮古史伝と庶民史では相違がみられる。どの資料に依拠しているのかを検討する前に両書の考えをみることにする。

〈史伝〉元中4年(洪武20年丁卯)5月、白川浜に船を装いて方物を積み、艮の方指して出帆、中山に到った。ところが言葉が十分に通じないので、手真似で心中の事理を伝えるに過ぎなかった。それで察度王は寓居を与えて後3年にして言葉が通じた。察度王は其の忠誠を嘉し、数多の引出物を与えて宮古島の主長に任じた彼は身に余る光榮に浴し綿を着て帰った。豊見親は直ちに八重山へ渡り彼地の主長を説いて中山に服属せしめ、1390年(洪武23)共に貢を捧げて中山に朝覲した。両先島の朝貢はここに始まった。(87～88頁を要約)

〈庶民史〉豊見親は船装を整え、艮の方に向かって出帆した。中山に到着したが、琉語を解することができなかったので伶俐なる者20名をしてこれを学ばしめ、3年にして漸く言語相通ずるようになり、初めて中山王察度に会って中山朝貢の意を通ずることができたのである。察度王大いに喜び、彼を宮古主長に任命したので、ここに宮古の貢服属関係が初めてできたのである。これ実に1390年(洪武23)のことである。

察度王紀(注・球陽)には、八重山島おもと嶽の神は宮古島比屋地嶽の神と兄弟神であるので二神相はかりて毎年貢物を納れたと記されているが、或は彼は八重山島へも渡って彼地の酋長に会し、両兄弟の誼を説いて相共に中山に朝貢したようにも思われる。が、これに関する記録、伝説は全くないので確かめることはできない。(207～208頁を要約)

長々と引用したが、与那覇勢頭が宮古の主長に任命された年は、史伝は1387年、直ちに八重山の酋長を説いて共に中山朝貢したのが1390年とする。これに対して庶民史は言語が通ずるようになった三年後の1390年、中山朝貢の意を伝えたので主長に任命された。そして、八重山の酋長を説いて相共に朝貢したかも知れないが、記録、伝説はないので確かめられないと慎重である。

次に王府の史料をひもといてみよう。

琉球の正史である中山世鑑、中山世譜、琉球国由来記、琉球国旧記、球陽および、遺老説伝には、察度王が与那覇勢頭を宮古の主長に任命したという記事は全くない。ただ球陽には「帰島の後、群黎を紹介し相与に商量して中山に投誠す。且八重山宇武登嶽の神と宮古山平屋地の神とは、素是れ兄弟なり。而して往来聘問す。是れに由りて其の二神相共に確議し、毎年穀を納れ誠を輸す」と記してある。

「帰島の後」に「中山に投誠」したというから1390年である。その3年前、琉球国に渡った与那覇勢頭は「直ちに中山に至りて王城に進み至る。丹庭の枝樹枝葉蒼青たり。皆国殿に向ひ、猶、徳化を慕ふがごとし。豊見親、之れを心に感ず」(球陽)としているがこの文面では

察度王に対面できたかどうか、判断できかねる。

宮古と八重山の兄弟神の由来は雍正旧記（1727年）の「比屋地御嶽」の頃に次のように記されている。「右由来ハ昔神代に久米島より御神兄弟渡海ニテ弟神は比屋地之神となり、兄神ハ八重山島おもと嶽の神となるたる由候。右神御縁を以て八重山、宮古前代より通融致し為る由候事」と。球陽の記事はこの由来を引用したのであろう。

次に宮古の資料をみることにする。

御嶽由来記、雍正旧記、宮古島記事（1752年）および、記事仕次には与那覇勢頭が宮古主長に任命された事は記されていない。「向裔氏下地家伝勤書」（「多良間村史」第二巻）の一つに「乍恐御訟申上候覚」がある。白川氏上地与人（14世恵當）と支流与那覇与人連署のいわゆる請願書である。日付は乾隆17申年（1752）8月である。

この覚によれば、白川氏元祖与那覇勢頭豊見親の位牌を長年祥雲寺に預け置いてあるが、以後もいままで通りに安置することを正式に許可してもらいたい。及び旧記に本付き別紙の通り、祥雲寺内に豊見親の碑文を建立することを許可してもらいたい。とのことである。その別紙が「白川氏与那覇勢頭豊見親碑文」で宮古の主長に任命されたことが記されている。白川浜を船出した与那覇勢頭は、

直ちに中山大琉球国の御地に到着。国人之を導き、恭しく察度尊君の聖朝に登り、謹て遠来の誠を奏し、拝伏して御臣下として島の貢を献じ候。是を以て聖朝の御感悦斜めならず。御礼甚だ厚く、則ち一島之主職を仰出される。柔遠の盛宴、賞物等を成し下され有り難く仕合奉り存候（世遠く位階賞物其の品今に伝わらず）是れ従り年々、貢物を捧げ、貢礼宴礼の朝拝御規式仰付けられる。

「一島之主職」（宮古島主）を賜わったことが確認できる初めての史料である。ところが白川浜船出の年と主長拝命の年は同年であるかのように受けとられる。この「覚」から二年後の白川氏家譜正統では、

工人に命じて白川で貢船を修造、方物を装載し、即ち広瀬御嶽及び諸神を祈拝す。洪武23年寅方に指し向い、直に中山に到る。方物を貢ぎ以て臣と称す。是れ中山通交の始まり也。時に察度王深く嘉び、遠来の誠を賞し、品物を賜い一島主長として封ず。是れ自り毎年入貢す。

白川氏家譜は主長拝命を1390年とするが、貢船を修造し船出したのも同年と見ている節がある。ただ、白川浜で祭壇を設け祈願したのち、「琉球中山入貢天朝之船」が飄来、中山入貢の礼を学び、王国の教化を受けることを決意、上国したという。1390年である。

与那覇勢頭の功績を祥雲寺内に建碑する請願は結果的に成就しなかった。それから15年後の乾隆32年（1767）9月、「与那覇勢頭豊見親逗留旧跡」の碑が琉球国の泊村に建立される。表文には一、中山朝貢したが言語が通じないので泊村に逗留させ琉語を学ばせ「共計三年」で通ずるようになったので朝覲したこと。一、従者の一人高真佐利が家郷を想い「阿屋具」を歌ったこと。一、飄到した琉球貢船から琉球王国を知り、白川浜から船出して来朝したこと、

が刻されている。裏文には建碑までのいきさつが刻されている。表文に「時に八重山の領、同に來り朝覲す」とも刻してある。宮古主長に任命されたことは触れられない。

これらの資料からも与那覇勢頭が宮古主長に任命されたことが記してあるのは「与那覇勢頭豊見親碑文」(1752年)が嚆矢である。これは白川氏家譜に踏襲される。「世遠く位階賞物其の品今に伝わらず」と断わるぐらいだから、伝承に依拠したのだろうか。どうして琉球の正史は宮古主長任命の件を扱わなかったのだろうか。それとも意図的に削ったのか。だとすればそれは何故か。ともあれ、庶民史が説くように、琉語を学び言語が通ずるようになって察度王に拜謁を許された1390年に宮古主長に任命された、と考える方が筋が通る。宮古主長を拜命して帰郷した与那覇勢頭は八重山の酋長を論してから改めて共に上国したのであろうか。この場合の八重山は波照間島か、西表島か、石垣島かは不明である。

宮古・八重山の中山朝貢を琉球の正史は「是れ由り中山始めて強し」と強調する。宮古が事大主義的に描写するのは大違いである。この「中山始強」については史伝も庶民史も触れていない。「宮古島郷土史考」の砂川明芳氏は次のように理解している。

与那覇勢頭たちの中山との結びつきのころ二つの変化がでてくる。それが、中山が強くなったことを示しているはずだ、と私は思う。その一つは南方物貨(胡椒など)が中山から中国への進貢品に出てくることである。もう一つは、朝鮮への倭寇被掠朝鮮民の送還を名目とした朝鮮との通交が始まったことである。(第5部31～32頁)

砂川氏は中山への南方物質を朝鮮民の供給源としての宮古・八重山を想定する。朝鮮と琉球の交流は1389年に始まる。1399年まで続き、10年ほどの中断を経て、1409年に再開される。この中断は朝鮮民の供給源に異変があったとする。それは宮古における争乱であろうとひもとく。争乱とは与那覇勢頭の死去後に起きたとする「与那覇原いくさ」のことで1400～08年頃と想定する。朝鮮との通交が中断した10年間である。そればかりではなく、一世代16年という世代計算から逆算して1408年頃に目黒盛と与那覇原が争ったという。この戦いを最後に“平和”になったという。それで朝鮮との通交は再開されたのだと説く。

与那覇原いくさのことは目黒盛豊見親を元祖とする根馬氏家譜正統(成立年不詳)には全く触れられない。詳細?は記事仕次に見ることができる。

## 5、与那覇勢頭の生卒

家譜は〇〇王世代ごとに各人の出来事を記録している。家譜及び旧記類の記録を基に与那覇勢頭の生卒不詳を検討し、与那覇勢頭を考えることにする。

まず忠導氏仲宗根豊見親をみる。童名空広。天順年間(1457～64)生まれとある。豊見親の孫(2世八重山豊見親玄数の子)真嘉戸金は弘治3年(1490)生れ、3世玄保は2歳ちがいの同5年(1492)生れとある。豊見親の生年を天順元年(1457)とみれば33歳の時、孫真嘉戸金が生まれたことになる。仲宗根豊見親の頃は一世代が16年となり、数え17歳で子が生ま

れたことになる（「郷土史考」第二部・59～60頁）。

次に白川氏2世大立大殿をみる。大殿は尚円王世代の成化年間に上国した折、私は70余歳を重ね主長職は困難となっている。それで息子能知伝盛と撰権空広を主長として交互に上国させたい旨を奏請、許可され帰島する。成化6～12年（1470～76）の間である。忠導氏家譜は空広は尚円王世代の成化年間、宮古島の主長を奉命した古伝がある、という。能知伝盛は尚真王世代の成化年間、父大殿に代り上国するが帰島の時逆風に逢い久米島に飄到、久米島で病死する。空広の主長奉命の古伝は、大立大殿の奏請が反映されたものであろう。

この三つの出来事から考えると、大立大殿が能知伝盛と空広に主長職を譲ったとされる年は尚円王世代の成化12年（1476）、まず最初に上国したのが能知伝盛で尚真王世代の成化13年（1477）と推測できる。この時の大殿は70余歳（71～73歳か）。仲宗根豊見親が宮古島主長に就いた頃も大立大殿は生存していた可能性もある。いずれにしても大殿の生年は70余歳を基にすれば1404～06年と考えられる。

与那覇勢頭豊見親のニ－リでは与那覇勢頭が20歳の頃、戦で瀕死の重傷を負ったことが歌われている。戦とはいつのことか。蘇生した与那覇勢頭は白川浜から中山に船出（1387年という）しているので、それより前の出来事である。船出の前年と仮定すれば与那覇勢頭の生年は1367年頃となる。これからすると38～41歳の頃に孫大立大殿が生まれたことになる。大立大殿は父泰川大殿の第三子で父が壮年の頃に生まれたという（宮古島記事仕次）。

砂川明芳氏提起の一世代16年を採用すれば、泰川大殿の生年は1383年頃で、22～25歳の頃に大立大殿は生まれたことになる。当時、どの年代を壮年とみていたのか。因みに室町時代の平均寿命は33歳、江戸時代で45歳という（社団法人日本リサーチ総合研究所）。

このような考えに基づけば、与那覇勢頭が瀕死の重傷を負った頃には泰川大殿は生まれていたことになる。伯牛の病で泰川原に隠棲した泰川大殿に代り、兄二人が早世したため第三子の立大殿が与那覇勢頭の家統を継ぐことになる。庶民史は「大里大殿の成人の頃まで与那覇勢頭豊見親は生存して居られたものと思われる」としているが、孫の大立大殿は成人どころか、未だ4～5歳の幼児ではなかったのではないだろうか。成人しなくても家統の継承（2世とする）は与那覇勢頭の意志によったのであろう。

島尻勝太郎氏は与那覇勢頭は与那覇原軍によって殺害されたと考えている（与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑復元記念集）。同意である。「与那覇原うさ」といわれる「兵を好んで戦伐止む時なし」の時代である（記事仕次）。この戦の終結を砂川明芳氏は1408年頃であると提起する（「郷土史考」第二部）。宮古島主長与那覇勢頭は未だ幼い大立大殿を目黒盛に託したのではないかと。目黒盛は中山との関係は伝承としても残されておらず、庶民に慕われ目黒盛豊見親と称し「一島之主長」になったとされる。根馬氏家譜正統には記録されていないので、中山から主長を拜命したかどうかは不明である。毎年の朝貢も不明である。名乗頭字も目黒盛に定政とあるだけで、2世真角与那盤殿以下5世中智盛まで名乗頭字はない。6世は定基である。

「根馬目黒盛豊見親跡島主 大立大殿童名まさり」（雍正旧記）というから、目黒盛は与那覇

勢頭島主との約束を果たしたのであろうか。大立大殿は尚泰久王世代の天順年間に宮古島主を拜命している。天順元～4年(1457～60)の間で、大殿は50代半ばと考えられる。真佐利(大立大殿)は目黒盛に養育されたように、主長となった大立大殿は目黒盛の5世孫に当る空広を養育したのではないだろうか。半世紀近くに亘り目黒盛とその系統が島主の地位にあったのであろうか。あるいは大殿が執権の地位にあったのか。豊見親のニーリに、

36、島行かば 与那覇よ

くに行かば 豊見親よ

37、人間ぬ なれやゆ

ゆかりしゃん あんだら

きばんしゃん あんだら

38、ゆかりがゆ えーんな

きばんしゃゆ みうすな

と歌われていることは、与那覇勢頭が「その蘇生と同時にすっかり武を捨ててしまって平和主義の徹底した仁者になった」(庶民史・202頁)と理解されている。与那覇勢頭のこの想いは、与那覇原いくさに勝利した目黒盛は「地方分拠の弊を除き、令を発して民を治し従来神祇を祀れる御嶽を修補して其の由来をただし、又戦没した諸将を其遺跡に祀って神祇崇敬の念を起さしめ、祭政相助けて人心和衷の途を採り、諒厚の風、仁慈の情を起さしむるに努めた」(史伝・79頁)ことに引き継がれたとも考えられる。

## 6、「旧記類」の与那覇勢頭

「始めて宮古・八重山の役人の家譜を纂修し及び賜ひて覆姓を用ふることを許す」(球陽)されたのが尚敬王17年=雍正7(1729)である。この通達を受けて白川氏家譜正統は乾隆19年(1754)、「12世裔孫前任頭役平良親雲上恵治謹識」のもとに編纂される。その家譜の序文に「雍正己酉(1729)麻姑・八重山は同に上国の時、協議して家系の修譜を奏請する。朝廷はその志を深く嘉び、両島に修譜を特別に許し、各家に覆氏(2字姓)を贈る」とある。それで「白川」を氏とするは始祖恵源公が白川で禎祥を得て中山に通交したことに因むと。また、恵源で始て貢船を造り、貢典の道を開いたので「恵」を名乗頭字にしたと。白川氏の由来をひもといっている。12世恵治は乾隆9年(1731)77歳で死去。13世恵通は同10年(1732)眼病で頭職辞任、同27年(1762)72歳で死去。14世恵當が上地与人(乾隆12～28)の時に家譜は王府系図座に提出されたことになる。13世恵通が「修譜を奏請」してから25年の歳月を費やしたことになる。

12世恵治は松原首里大屋子の時、「旧記調役」として御嶽由来記(1707)を全修している。その時調役は「島中の年寄りを集め聞取りした古語(昔話)を熱談し用捨を相究メ」編纂したという。また、平良頭の時、下地頭昌繁、砂川頭昌朗、伊良部首里大屋子、塩川与人、嘉手刈

目差らと旧記の「調役」として、雍正旧記(1727)を編纂している。因みに砂川頭昌朗は恵治の妹と婚姻、義兄弟の間柄である。

白川氏家譜に収録された元祖与那覇勢頭対豊見親についての詳細は「康熙丁亥旧記」と「雍正丁未旧記」に記してあると断わっている。旧記とは12世恵治が調役として編纂した「御嶽由来記」と「雍正旧記」のことである。しかし、今日手にすることができる二つの旧記にはその詳細は見えない。そういえば、豊見親の碑文を祥雲寺内に建立したいと請願した14世恵當も「旧記二本付き別紙の通り」碑文を作成したと断わっている。当時は収録されていたのが何らかの理由で削除されたのであろうか。白川氏やその姻戚者が旧記の調役として責任を荷っている時代である。もし削除されたとすれば、それは何時の頃か。

御嶽由来記には康熙44乙酉年作成の由来記、康熙45丙戌年作成の宮古島御蔵元草創之事・他、康熙46丁亥年作成の仲宗根豊見親忠節勲功之事・他が収録されている。由来記の廣瀬御嶽の由来に与那覇勢頭は記されているにすぎない。収録されていたとして、例えば「中山朝覲草創之事」とか「与那覇勢頭豊見親忠節勲功之事」などが想定されよう。

雍正旧記に至っては全く見ることはできない。もし収録されていたとすれば「島中の為勲功有之候人の由来」の項目であろうと考える。「乍恐御訟申上候覚」や白川氏家譜の「遺老説」に見られるように宮古島主の相続き方を考える。与那覇勢頭の跡に糸数大按司、その跡に根馬氏豊見親、その跡に大立大殿、その跡に仲宗根豊見親と続く。この系統を考慮すれば「与那覇勢頭豊見親跡島主 根馬氏目黒盛豊見親」の項が想定されよう。

①御嶽由来記及び雍正旧記の編纂。②家譜編纂の許可。③与那覇勢頭豊見親の碑文建立の請願。④白川氏家譜正統の王府認可。⑤与那覇勢頭豊見親逗留旧跡之碑建立に至るおよそ60年間の出来事は一連のものとして考えられる。いわゆる埋もれていたかも知れない与那覇勢頭が近世の社会に蘇ることになったのかも。それは「世遠く位階賞物其の品今に伝わず」というぐらいだから、白川氏正統として再認識されるまではそれ程の関心がなかったということなのだろうか。旧記および家譜の編纂事業が大きな切っ掛けとなったのではないだろうか。

泊村の「旧宅と井泉(注：豊見井)とは、豊見親旧跡の係わる所なり。若し記さざれば、遂に其の伝を失うこと無き能わず」として、逗留旧跡の碑記建立を企画したのも12世恵治である。恐らく旧記調役を通して痛切に感じたのかも知れない。その思いは家譜に反映されたとみられる。中山朝貢から三百年余を経て、与那覇勢頭を知る手がかりはこの時期に整理されたものであろうか。12世恵治の思いが元祖与那覇勢頭に投影されたのかもしれない。

## 7、おわりに

与那覇勢頭の周辺をうろついただけである。与那覇勢頭を分かりにくくしているのは、「位階賞物其品」が後世に伝承されなかったこと、「旧記」に反映されたはずの事象をみることができないこと等であろう。与那覇勢頭の時代は人口が増加、中国との係わりも濃度を深めてい

る。日本、沖縄あるいは中国などから「渡来人」が出入りしていた時代でもある。そのことは伝説等にもわずかに反映されている。分かりにくい与那覇勢頭も渡來人の視点で見直す必要があると思う。

「家譜」や「二八の頃」などをもとに、一世代を16年と提起した砂川明芳氏の考察は看過すべきではないと考える。「明治17年旧慣調査書」(宮古島近古文書・柳田文庫)の「礼の部」の婚の項に次のようにある。「男子ハ凡テ何歳ニシテ娶ルカ。女子ハ何歳ニシテ嫁スルカ」との間に「定ムル年ナシ。十七、八歳ヨリ、三十歳マデ娶嫁ス」と答えている。明治初年の頃にも早ければ17、8歳で結婚している社会である。600年前の社会を考えれば16歳で娶嫁したとしても全く否定されるものではないだろう。その頃の平均寿命は33歳とされる。

一世代を16年あるいは17、8年、仲宗根豊見親の生年を1457年(天順元)とすれば、“与那覇原いくさ”は1408年、あるいは1405、1402年頃となる。目黒盛の一子真角与那盤が生まれた前年にあたる。与那覇原を取った後に生まれたとする伝承による。すなわち、与那覇勢頭の中山朝貢後に“与那覇原いくさ”は起きたことになる。(砂川明芳氏の考察より)。

#### 〔参考文献〕

- 1 『中山世鑑』(「琉球史料叢書」第5巻・1972年)
- 2 『中山世譜』(「琉球史料叢書」第4巻・1972年)
- 3 『琉球国由来記』(「琉球史料叢書」第2巻・1972年)
- 4 『琉球国旧記』(「琉球史料叢書」第3巻・1972年)
- 5 『球陽』読み下し編(「沖縄文化史料集成5」1978年)
- 6 球陽外巻『遺老説伝』(「沖縄文化史料集成6」1978年)
- 7 『平良市史』第3巻 資料編1 前近代(1981年)  
「御嶽由来記」「雍正旧記」「宮古島記事」「宮古島記事仕次」「白川氏家譜正統」  
「忠導氏家譜正統」
- 8 慶世村恒任『宮古史傳』(1927年／複製版1955年)
- 9 稲村賢敷『宮古島庶民史』(1957年／新版1972年)
- 10 稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』(1962／復刻版1977年)
- 11 『村誌たらま島』(1973年)
- 12 『多良間村史』第2巻 資料編1 王国時代の記録(1986年)
- 13 外間守善・新里幸昭『南島歌謡大成Ⅲ 宮古編』(1978年)
- 14 砂川明芳『宮古島郷土史考』第2部(1984年)
- 15 砂川明芳『宮古島郷土史考』第5部(1989年)

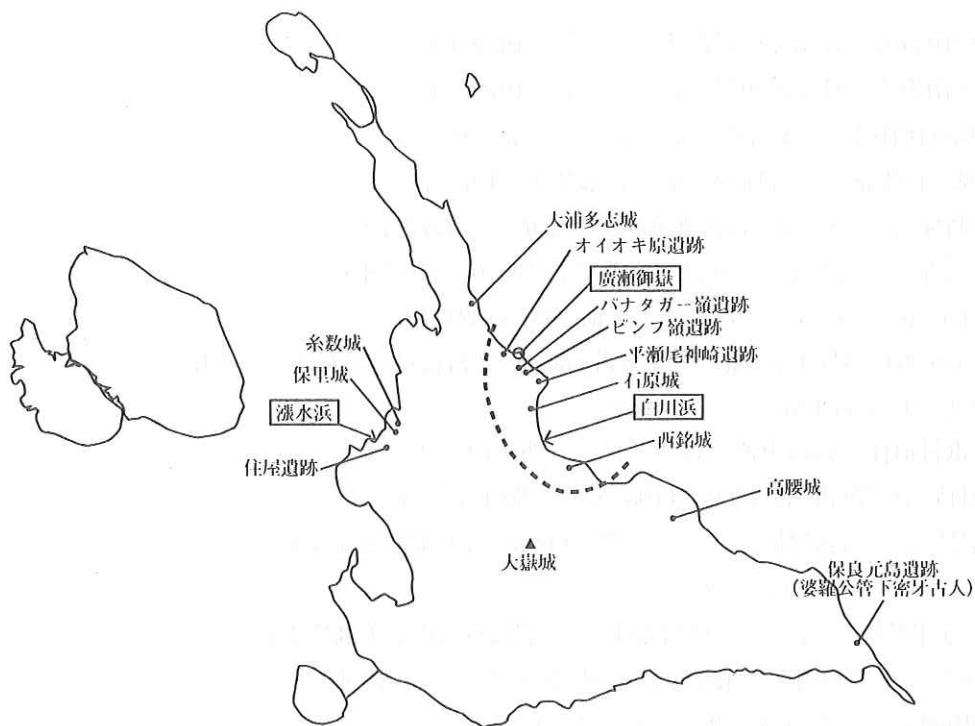
#### 〈付記〉

与那覇勢頭は白川浜に人々を集め貢船を修造して中山に向けて船出した。船出に際して廣瀬

御嶽及び諸神に祈願している。このことから考えるに白川浜から廣瀬御嶽に至る一帯は与那覇勢頭が領する地であったように思われる。白川浜には琉球津堅島のクバラバズ（小真良はひ）兄妹も上陸している。当時の白川浜は島への出入口（港）であった可能性がある。琉球国の使者が飄到した地も白川浜であったと見られる。

子の泰川大殿が伯牛の病で泰川原に隠棲していたというので、その頃はすでに居住域を移動していたのかも知れない。それは中山朝貢後、宮古の主長となり、漲水浜の港を手中にしたことによるのではないだろうか。ニーリの1節「むいか越 与那覇よ／与那覇しど 豊見親よ」に反映したとみられる。

与那覇勢頭が領していたであろう白川浜から廣瀬御嶽にかけては13～14世紀頃の遺跡が見られる（下図参照）。廣瀬御嶽の西方丘陵にオイオキ原、その南東にピンフ嶺、バナタガー嶺、平瀬尾神崎、この南に石原城、その南東に西銘城などの遺跡が立地している。これらの遺跡が歴史的な背景として白川浜は重要な位置を占めていたのではと思う。これら遺跡（集落）の衰退は、港が漲水浜へ移動したと深い係わりがあるのではないだろうか。それは中山朝貢という新しい時代が到来したと不可分に絡みあっているように思える。



与那覇勢頭豊見親の領域想定図（点線内）

（しもじ・かずひろ）